

艦を二十五〜二十三ノットの艦が護れるものかと疑問を呈している。

米国産 「第一〇二号哨戒艇」

神奈川県 宮川 績

戦後満六十年、なぜか先の大戦での体験が次々と不思議によりみがえってくるものである。それは青春を故国存亡の戦いに捧げたためかも知れない。わずか八カ月の海軍召集であったが、乗船した船は、「第一〇二号哨戒艇」、駆逐艦「初梅」、駆逐艦「潮」、そして最後は「第一雲洋丸」であった。

昭和十九（一九四四）年十二月、東京高等商船学校機関科を卒業、南洋海運（株）に入社したが、直ちに海軍に充員召集され、翌二十年一月六日付で少尉に任官し、横須賀海軍工機学校にて約一カ月間、海軍士官としての教育を受けた。

当時は、現役・召集を問わず、兵隊に行くときは、必ず町民が駅まで送り、「バンザイ・バンザイ」と歓呼の声に送られて出征したものである。私の行く先は横須賀であったので、ひそかに出征しよう

うとしたが、町の女子青年団の幹部が「績さん、

座間で海軍将校は初めてです。皆さんがぜひ送りたいと言っていますので送らせて下さい」と再三言われたので気持ちよくお受けした。町の鎮守様

「鈴鹿明神社」の神殿に武運長久と戦勝祈願をし、

「祝出征・海軍少尉宮川績」ののぼりを先頭に、

小田急線座間駅までの一キロを行進した。

工機学校で一カ月の士官教育を受けた後「貴殿は呉にて第一〇二号哨戒艇に乗船せよ」の辞令を受けた。哨戒艇と聞いた時「ああやっぱりそうか」と思った。当時海軍は、兵学校・機関学校出身者は戦艦、巡洋艦など大型艦船に乗るのに対し、商船学校出の予備士官の多くは海防艦、哨戒艇、駆潜艇等の小艦艇に乗せられた。

「一〇二号哨戒艇」は、緒戦のスラバヤ沖海戦で、昭和十七年二月、日本軍が蘭領印度支那を制圧したとき、スラバヤのドックで修理中のアメリカ駆逐艦「スチュワード」を捕獲、日本名を「第一〇二号哨戒艇」と命名し、ジャワに根拠地を置

く第二南遣艦隊に所属したものである。

この船は、第一次大戦の末期、アメリカ海軍が急造した四本煙突の駆逐艦二百五十隻の中の主席艦であった。一九三〇年三月、ブラウエア河畔での進水式で有名なチャールズ・スチュワート提督の孫娘が船首にシャンパンのビンを投げつけて「スチュアート」と命名された由緒正しい出生である。

生まれたときは煙突が四本であったが、日本軍が捕獲した後、一、二番を一緒にして三本煙突に改造した。これは米海軍を悩ませたらしい。この艦が有名になったのは、これから述べる数奇な運命―米国・日本そして再び米国籍へ帰ったということである。

そして日本国籍であった二年余りの間に、有名艦二隻を含む八隻の米潜水艦を撃沈、グラマン一機を撃墜するという輝かしい戦果をあげたことによる。

私は二月十二日「一〇二哨」に着任した。船は

呉海軍工廠の第四号ドックに入渠中で、ボイラーの煙管換装、探信儀取替えほか大修理中であつた。初めての艦船着任、非常に心細かつたが、艦長は先輩、ほか全員予備士官であつたので気が楽であつた。

呉での修理停泊一カ月間は、商船学校の呉実習時、お世話になつた久安さんの家によく遊びに行つた。ある日、熱烈な愛国心の強い下野さんという人を紹介された。強靱なる精神と強固な肉体でなければ立派な指揮官になれない。禊みそぎをしなさいと言われ、ふんどし一つになつて何回も何回も冷水を浴びせられた。その時、一振りの「備前長船祐定」の名刀を頂戴した。早速軍刀に仕込もうと思つたが、短いので断念し、紫の襷たすき紗さにくるみ、以来私の赴任するところ必ず共に行動し、最後まで運命を共にしたのである。

艦長以下「一〇二号哨戒艇」の乗組み士官は八人、連日連夜、黒マントの中に一升ピンを忍ばせて、海軍工廠守衛の「捧げ銃」に軽く答礼し、呉

のためならいつ死んでもいいというほど尊敬されていた。夕暮れともなると、「さあ、行くぞ」と艇長の号令一下、黒マントならぬ革靴に一升ピンを忍ばせ、呉と同じく守衛に軽く答礼し、満開の桜並木の山道を登り、萬松楼に毎晩通つたものである。

ある日、廊下を歩いていたら前方から小さな中尉と出会つた。こちらは少尉、思わずハツと敬礼した。お互いげん顔、どこかで見た顔、そうだ厚木中学の同級生、山田富三君ではないか「やあー、宮川」「やあー、山田」肩を抱き合つて喜んだ。正に奇跡である。彼は中学五年の現役で海軍兵学校（第七十二期）に入つた秀才であつた。彼曰く、「今、潜水艦口号に乗つており、近々出撃だ。お互いに国のため頑張ろう」と固い握手をし、再会を誓つて別れたが、その後沖繩方面に出撃、帰らぬ人となつてしまつた。

いよいよ出撃だ。商船学校の修業年限は五年半、内一年はアプレンテスと称して汽船実習があつた

の料亭「グリーン」や「ロック」等に繰り出したものである。着任前、海軍はよく飲み、よく遊ぶとは聞いていたが、こんなに豪勢とは想像もしなかつた。

三月十三日呉出港、同日門司に入港した。当時門司港一帯は、敵の機銃掃射を防ぐため何十もの阻塞気球が揚がつており、またどういふわけか外出する士官は短剣に代えて日本刀を吊るようにとの、お達しが出ていた。

三月十八日、我々海軍士官にとって憧れの港である佐世保軍港に入港した。佐世保には海軍士官行きつけの「萬松楼」と特務士官の「清流」の二つの料亭があつた。萬松楼は小高い丘の上にある料亭で、日本の四大軍港、舞鶴・横須賀・呉・佐世保の中でも最も有名で、海軍士官として一度は遊んでみたい料亭であつた。

艇長水谷大尉（後に少佐）は識見・技量とも抜群の提督で、豪放磊落、士官は勿論のこと下士官以下一兵卒にいたるまで、その信頼は厚く、艇長

が、我々の時は戦争に突入したため廃止、従つて機関操作には非常に不安があり、おまけにアメリカ製のタービンとなればなおさらであつた。しかしその不安は着任数日にして一掃された。商船では士官といえども自分から手を汚さなければならぬが、帝国海軍では筋金入りの下士官がすべてやつてくれるので手をこまねいても結構であつた。

この「鹿島」「清河」の両船には、朝鮮の濟州島向けの水上特攻兵器「震洋艇」が約百隻搭載されており、その護衛にあたり、無事すべてを降ろし護衛の任務をまっとうした。「震洋艇」とは、俗称「青がえる」と称し、船体はベニヤ板で緑色に塗装された全長約五メートル、先端に爆薬を詰め、水上速度四十ノットで、停泊中の敵艦船の横腹に体当たりするという海上特攻兵器であつた。敵もこれを知つて、船の周囲に材木を浮かせて防いだため、ほとんど戦果はなかつたと言われている。

濟州島で船から海面に降ろすのを見ていたら、「震洋艇」同士が接触してベニヤ板が、剥がれる

というお粗末な艇であった。

太平洋戦争の戦局の進展により海軍の第一線部隊から魚雷艇を一隻でも多く、一時間でも早くという要望が中央に殺到した。そんな中で、モーターボートに爆薬を積んで敵に体当たりを敢行しようという考えで実現したのがこの震洋艇である。船体はベニヤ、船首に二百五十キロ爆薬を装備、後部に一三ミリ機銃一基を備え、トヨタの自動車八十馬力の中古エンジンを積み、速力四十ノットで、敵の揚陸部隊が上陸点に進入した時、夜陰に乗り集団で艦船に奇襲、体当たり攻撃により撃破するのが目的であった。

昭和十九年中ごろから建造開始、終戦時までに約六千二百隻が建造され、フィリピン・台湾・小笠原・沖縄などに配備された。搭乗員は航空機乗りとして教育を受けた飛行予科練習生の中から志願者を募り配属した。

濟州島に一人で上陸散策していると、現地の若い女性に声をかけられた。帰艇後得意になってモ

テた話を士官室で話したら、「それはスパイだ」と、こつぱどく水谷艇長に大目玉を食らった。

四月八日、濟州島を出港、当初は第二南遣艦隊に所属していたのでシンガポール經由ジャワに行く予定であったが、急遽上海に変更され、上海沖の四礮山列島に十二日到着、ここに仮泊、投錨した。大小無数の島々からなるこの列島は、揚子江の影響を受けて海面は一面濁流であった。約十日間の停泊中、船団会議、艦船集結、そして四月二十六日「シモ〇三船団」を編成して内地に向け錨を揚げた。

船団は「鹿島丸」「満州丸」「阿武隈川丸」「新屯丸」「泰久丸」「南隆丸」の輸送船六隻を、「朝顔」「一〇二哨」「海二六」「宇久」「駆潜二〇」「掃二九」「崎戸」「屋代」「海四一」の護衛艦九隻が護衛船団を組み、計十五隻の大船団となって一路北上、白昼堂々と東支那海を北上する様は「ああ堂々の、輸送船……」の歌そのものの威容であった。

翌二十七日、船団の先頭を走っていた駆逐艦「朝

顔」から船団前方、三キロに「浮上潜水艦、発見」の報告を受けた。直ちに「爆雷戦用意、総員配置に付け、最大戦速一杯……」こんなチャンスは二度とない。一度、爆雷投下の瞬間を見てやろうと上甲板に上がった。三十ノット近い速力となると、ロープにつかまらなないと歩けない。ロープにつかまりながら船尾に行った。

吉見機雷長の「発射ッ」の号令で機雷が、左右の発射機より発射された。深度六〇メートル、爆発の瞬間船体がドドドッ……と上下動する。なるほど速力が遅ければ自分の船もやられるわいと思っ

った。商船は、テレグラフが、微速・半速・全速の三段階であるが、軍艦の場合は、それに第一戦速・第二戦速・第三戦速・一杯がある。一杯は船がやられるか、エンジンが壊れるかの最大限のスピードである。

しばらくその付近を旋回、戦果を確認したら「やった、やった、重油が浮かんで来たぞ……」と艦

橋の方から声がしたが、本当に敵潜に被害を与えたかどうか疑問であった。

次いで翌二十八日、〇〇一三の真夜中、「空襲警報発令」の艦内ベルが鳴った。急遽飛び起き機関室に飛びこむやいなや「マーチンPBM」二機による爆弾投下及び機銃掃射を受けた。我が方も直ちに三連装二五ミリ機銃で応戦、熾烈な対空戦闘が始まった。

敵の機銃により舵取機の舵索が切断され、一時操舵不能となり、人力操舵に切り替え、沈没はまぬがれたものの、機銃員の被害甚大で、戦死十、重傷十、軽傷二十、計四十人の死傷者を出した。

狭い士官室は血の海となり、右に左に流れる血の海に浸りながらの堀軍医長の活躍には頭の下がる思いがした。幸運にも、機関室には一発の機銃弾が飛び込んだが、機関室内をカランコロンと八つ当たりした程度でケガ人は無かった。

夜明けとともに、戦死者を軍艦旗にくるみ、後部甲板に全員整理、「海行かば……」のラッパ吹奏、

挙手の礼とともに、船尾より遺体を落下させ水葬に付した。この戦闘で機銃員がほとんど全滅したため、機関科も機銃を練習せよとの命令で、私も初めて機銃の銃座に座り、旋回・仰角などの操作を体験したが、内地に帰るまでは実戦の機会がなかった。

この戦で、「二〇二哨」が発射した弾は、二五ミリ機銃が八百七十七発、一二ミリが四十発、また爆雷は全護衛艦で五十二発だそうである。全船団の被害者は戦死十七、重傷十三、軽傷二十九、計五十九人、一〇二哨が一番多かった。七ノットという、遅い船団が、一隻も撃沈されることなく無事、山口県油谷湾に帰港できたのは奇跡というしかない。おそらく敵は、世界最大の戦艦「大和」ほか日本残存連合艦隊を、鹿児島南方洋上にて全滅させ、その戦果に浮かれ「ザコ船団」など目でもなかったのかもしれない。

五月二日、懐かしい呉に一カ月半ぶりに入港した。その時は、我が家に帰ったような心境で、や

かった。

「初梅」は、昭和二十年六月十八日、終戦のわずか二カ月前に竣工した日本最後の駆逐艦で、この竣工をもって帝国海軍の駆逐艦はその歴史に終止符をうった。

五月二十五日、横須賀接岸中の駆逐艦「潮」に着任。この艦は帝国海軍でも特型駆逐艦として比較的プライドも高く、乗組員も商船学校出はほとんどおらず、兵学校、機関学校出の職業軍人で占められていた。従って前の艦のような親しみは全然なかった。ただ思い出といえ、兵学校出身の私より一つ年下の若い中尉に、ガンルーム(少尉・中尉の食堂)に入るとき道を譲らなかつたとい縁をつけられ、一発ぶんなぐられた。任官して殴られたのは二回目である。

五月二十九日、横浜大空襲の際は、隣に停泊していた戦艦「長門」とともに主砲・機銃を一斉に横浜方向に向けたぐらいの記憶しかない。

その後またまた転任、横須賀から横浜までの転

れやれ、これで少しは休養できるわいと思ったのも束の間、直ちに舞鶴に転勤命令が来ていた。当時、海軍は髪を伸ばしても文句を云われなかつた。艇長が理解あつたので士官全員が伸ばしていたので、私も着任早々のばし始め、そろそろ分けようかと思っていたら、転勤命令が来て残念ながら坊主頭にせざるを得なかつた。

五月二十日、数々の思い出を残してくれた「一〇二号哨戒艇」に別れを告げて、呉から舞鶴で偽装中の駆逐艦「初梅」に着任する。同艦は海軍が緒戦以来の数々の教訓から、ボイラーをすべて独立させ、一缶室に被弾しても他の三缶で航行できるように設計された「T型駆逐艦」であつた。

着任して、行李を開きやれやれと思つたら、一週間足らずで、今度は横須賀に停泊中の駆逐艦「潮」に転勤せよと来た。海軍人事部は、人間をなんと心得ている。今なら荷物も簡単に宅配便で送れるが、当時は、いちいち所帯道具を「柳行李」に詰めて、将校といえども自分で担がねばならな

動手当て十一円を貰つて「第一雲洋丸」で横浜港に着任した。海軍というところはずいぶん転動手当てを奮発するところだ。この「第一雲洋丸」は七月十四日、室蘭にて空爆を受け沈没した。

商船学校の同期生は全員、最低半年の浪人クラス、旧制高校や海兵など滑った連中で、中には高等工業の中退や、物理学校から入学する者など多士濟々であつた。中学時代に憧れた七つの海に雄飛する華やかな商船士官の夢は、大東亜戦争の勃発によつてうち砕かれ、そして海軍に召集、海兵出の若い士官に予備士官と馬鹿にされ、癩しやぐにさわつたが、戦争がなかつたら軍艦に乗って爆雷を投下したり、あるいは空爆を受けて船が沈没するなど、普通の人では経験出来ない海軍生活の思い出は残らなかつただろう。

昭和二十年五月、約一カ月間、駆逐艦「潮」に乗船、「長門」の隣に停泊していた。かつての連合艦隊旗艦「長門」は小海岸壁で「米国第三艦隊」の空爆を受け艦は一部浸水したが致命傷とならな

かったので沖出しして終戦を迎えた。

米国第三艦隊は、昭和二十年七月初めより東北・北海道を空爆・艦砲射撃をした後、南下し、七月十八日横須賀の海軍工廠ほかを空爆した。私は「第一雲洋丸」に乗船、室蘭停泊中の七月十四日、戦艦ミズリーを旗艦とするこの三十八部隊の空母ヨークタウン他から飛び立ったグラマン四十機の波状攻撃を受け、船は沈没、九死に一生を得て助かった。

八月十五日の終戦のご詔書を室蘭高等女学校で聞いた後、函館から青森、そして横須賀鎮守府に出頭して召集解除となった。そして当時は交通事情が悪かったので座間の実家まで徒歩で帰った。半長靴をはいて短剣を風呂敷にくるみ哀れな復員将校はトボトボと家に帰る。その時、この大艦隊を目の当りに見たのである。夜ともなれば相模湾一帯が一大不夜城となり、ジャズ音楽が嫌でも耳に入り、敗軍の将は、この連日連夜の光景に切歯扼腕、口惜しがったものである。

二隻を含む八隻の米潜水艦を撃沈、グラマン一機を撃墜するという輝かしい戦果をあげた。

執筆者は、昭和二十年五月二十日、駆逐艦「初梅」に着任する。「T型駆逐艦（松改型）」日本海軍の駆逐艦としては最後の竣工の艦であった。また竣工が終戦二カ月前の竣工であるため、特筆すべき戦歴もないが、六月二十八日には、舞鶴付近で敵機の攻撃を受けて損傷、七月三十日には小浜付近で擱座した「楨」をを救難中に、自らも敵機の攻撃を受け損傷している。

執筆者は、五月二十五日、今度は横須賀接岸中の駆逐艦「潮」に着任した。「潮」二代目の特型駆逐艦中期型の最後の艦で、昭和六年十一月浦賀で竣工した。

特型駆逐艦は二十四隻あって終戦時に残っていた二隻のうちの一隻である。戦歴も古く中国戦線、ミッドウェー海戦、珊瑚海海戦、アッツ島攻略戦などにも参加している。

昭和十八年四月からは第七駆逐隊、昭和十九年

【解説】

体験記執筆者は、昭和十九年十二月、東京高等商船学校機関科を卒業、直ちに海軍に充員召集され、翌二十年一月六日付で少尉に任官し、横須賀海軍工機学校にて約一カ月間、海軍士官としての教育を受けた。

僅か八カ月の海軍召集であったが、その間、乗船した艦船は、「第一〇二号哨戒艇」、駆逐艦「初梅」、駆逐艦「潮」そして最後は「第一雲洋丸」であった。

「第一〇二号哨戒艇」は、体験記の中に詳述されているように、第一次大戦の末期、アメリカ海軍が急造した四本煙突の駆逐艦二百五十隻の中の主席艦で、太平洋戦争の緒戦のスラバヤ沖海戦後、スラバヤのドックで修理中のアメリカ駆逐艦「スチュワード」を捕獲、日本名を「第一〇二号哨戒艇」と命名し、第二南遣艦隊に所属したものである。そして日本海軍籍であった二年間に、有名艦

一月には北東方面艦隊第一水雷戦隊に編入され、内地、内南洋方面の護衛任務に着き、タラワ島で物資揚陸中に爆撃により損傷している。

しかし終戦後まで、このような戦歴で生残り、終戦後の昭和二十三年に解体され、長年にわたり一応名を轟かせた特型駆逐艦は永遠に消えたこととなる。

体験記執筆者は、この「潮」の乗り組む光栄に浴したが、最後は横浜港で「第一雲洋丸」に着任した。この「第一雲洋丸」は七月十四日、室蘭にて空爆を受け沈没した。